

## 愛を生み出す-いのち

25.12.07 アドベント②

崔楚英

ヨハネの手紙 第一 4:9-10

9.神はそのひとり子を世に遣わし、  
その方によって  
私たちにいのちを得させてくださいました。  
それによって  
神の愛が私たちに示されたのです。  
10.私たちが神を愛したのではなく、  
神が私たちを愛し、  
私たちの罪のために、  
宥めのささげ物としての御子を遣わされました。  
ここに愛があるのです。

### <導入>

アドベント2週目を迎える。今日は神様の愛について一緒に考えてみたいと思います。

「神は愛です。」聖書は神様の愛について語っています。「神は愛です」という言葉は今日の本文である。ヨハネの手紙第一 4:16 に書かれています。この言葉は私たちを慰め、力を与え、また励ましとなります。また「よし。これからも神様とともに生きよう」と前に向かって一步踏み出せる勇気も与えてくださいます。

私たちは「神様の愛」を頂いたものとして、その愛に応えようと、ふさわしく歩みたいと決心し祈ります。そして私たちが持っているすべての知性と、感情を動員して、その愛を少しでも深く理解したいと願っています。ですが、神様の愛は広くて、深くて、人の理解や想像をはるかに超えるものです。子供に親の愛が完全には分からないように、私たちにも神様の無条件的な愛が不思議でしようがないかもしれません。

今日もその不思議な神様の愛について考えて、また励まされたいと思います。

### <1.怒る神?>

親は子供を愛しながら、怒る時がありますね。私は子供のころ、悪いことをしてしまうとき、お母さんに怒られながら、「お母さんはね、愛しているから怒るのよ」と言われる時がありました。そのたびに「愛しているなら優しく教えてくれてもいいのに。。。」「そのほうがもっと素直に聞けるのに」と思っていました。

なかなか「怒る」と「愛する」を同時に考えることが難しかったですね。怒っているなら愛しておらず、愛しているなら怒らないと思いがちかもしれません。深く愛するということは怒らないことであり、激しく怒るということは愛していないことだと理解する場合が多いかもしれません。また「怒る」ことは大体

よくないことだと考えたかもしれません。そのためか、「神は愛です」と聞くと自然に、「神は怒る方ではない」という考えが出てきます。皆さんはどうでしょうか？

聖書はどのように教えているでしょうか？

今日の本文の10節を読んでみましょう。

10.私たちが神を愛したのではなく、

神が私たちを愛し、

私たちの罪のために、

宥めのささげ物としての御子を遣わされました。

ここに愛があるのです。

10節の後半に御子、つまりイエスキリストを「宥めのささげ物」として遣わされたと書いてありますね。「宥めのささげ物」でイエスキリストを紹介するのはここだけではなくローマ人への手紙にもあります。

「宥める」とは感情的になっている人や怒っている人を、穏やかな状態に戻すことを意味しますね。

つまり「宥めのささげもの」だというのは、誰かが怒っているということですね、誰が怒っているのか？「神様」です。何に対して怒っておられるのか？ 罪(ローマ 1:18)また、罪人(ヨハネ 3:36)に対して怒っておられる神様です。 神様も怒るのです。

ここで人の怒りと神様の怒りの違いについて考えてみたいと思います。

人間の怒りはしばしば個人的な感情と利己心に偏る場合があります。個人的な侮辱や損害に対する不快で敵対的な感情である時もありますね。また、正義をもって怒っていたとしても過剰に度を越えて怒りすぎてしまう傾向があると思います。

神様の怒りはどうでしょうか。神様の怒りも感情ですが、制御不能ではありません。神の怒りは気まぐれな感情ではなく、意志的で主権的な裁きですね。つまり、神様の怒りは感情の領域に属しますが、その本質は神様の義なる性質から生じる、正当かつ意図的な反応であるということです。また度をすぎることはできません。

神様の怒りはご自分の聖なる義から出てくるものですので、罪がなければ神様は怒ることはないでしょう。すべてが正しければ怒らないのです。

ですが、残念ながら聖書は、「すべての人は罪を犯して。。。」とローマ人への手紙にあります。ここでの罪とは誰かの物を実際盗んだり、害を加えたりすることだけではなく、自己中心で、自ら神になろうとすることを指します。

すべての人がそのような状態にあり、神様の怒りのもとにあるのです。しかし、イエス・キリストはそ

の怒りを鎮めるための、「宥めのささげ物」となられました。自分に背き、反逆し、敵対する怒りの対象である罪人のために世に来られました。

9 節をお読みいたします。

9.神はそのひとり子を世に遣わし、

その方によって

私たちにいのちを得させてくださいました。

それによって

神の愛が私たちに示されたのです。

## <2.神様の愛－神様ご自身から>

「神の愛がここで示された」とありますね。

ここでの神の愛はどのようなものでしょうか？「愛」と言いますと範囲はとても広いので。聖書での、「愛は寛容であり、愛は親切です。」と( I コリ 13:4)にあることからすこし考えてみましょう。

これをもって、人の愛と神様の愛の違いについて考えてみたいと思います。

親子関係の前提ではなく、人が他人を愛するという時、つまり親切であり、寛容であるときはどのような時でしょうか？ 全ての人とすべての時に親切、寛容に接することができるでしょうか？おそらく「私はできます」と答えられる人は多くないでしょう。

助けが必要な人に、仲良い人に、また謙遜さがあり、感謝することが分かる人であればあるほど、その人には親切に接しやすいし、寛容に接しやすいところがあるでしょう。 例えば:もし相手がとても乱暴で、変わらない悪人であり、怒りを真似ぐ人であれば、その人を常に愛すること、親切にまた寛容に接することはなかなか難しいかもしれません。

このように人の「愛」には、目に見えない受容条件のようなものがあるのだと思いました。

多くの場合、それは「愛そうとする相手の状態」と深く関係しています。相手が「愛するための受容条件」を満たしていれば、自然に、あるいは少し頑張れば、私たちはその人を愛し、親切に、寛容に接することができます。しかし、その条件が満たされない場合は、どうしても「親切に、寛容に」ふるまうことが難しくなります。そして、この「受容条件」は人それぞれ違うのだと感じています。

神様の愛は、人の愛とは決定的に異なります。その違いの一つは、相手の状態によって変わらない愛であるという点です。

私たちが正しいから、いい子でいるから愛してくださるのではありません。むしろ聖書は、「私たちがまだ罪人であったときに、キリストが私たちのために死んでくださった」と語っています。

神様が私たちを愛してくださる理由はただ一つ。「神様ご自身が愛であるから」です。

神様の愛は、神様のご性質そのものから湧き出ているのです。

例えとして、神様を太陽にたとえることが許されるなら

太陽はすべてのものを温かく照らします。照らされる相手が花であっても、泥であっても、動物であっても、同じ光を注ぎます。「花は必要としているから照らす」「泥は意味がないから照らさない」ということはありません。太陽の暖かい光は、照らされる側の状態に左右されず、太陽そのものから出ているのです。

同じように、神様の愛も、神様ご自身からあふれ出ています。

その愛はすべての人に注がれています。

その愛を受けても頑固なままの人にも、恩知らずの人にも、「神なんていらない」と言う人にも、神様は変わらず、無条件の愛を注ぎ続けておられるのです。

ここまでをまとめますと。神様が怒る理由は人の罪のために怒ります。神様が愛する理由は神様ご自身が愛なるかたであるからですね。

### <3.与えられたいのち>

この神様は、私たちに御子イエス・キリストを遣わし、私たちに「いのち」を与えてくださいました。聖書にはこう書かれています。

9a 神はそのひとり子を世に遣わし、  
その方によって、私たちにいのちを得させてくださいました。

ここで「いのちを得させてくださいました」という言葉に、「え？ いのちなら、もともと持っているのでは？」と疑問を持つ方もいるかもしれません。息をし、動き、触れ、感じて生きているのに。

しかし、ここで言われている「いのち」とは、御子イエス・キリストを信じることによって与えられる、靈的ないのちのことです。聖書は、「唯一のまことの神と、神が遣わされたイエス・キリストを知ることが永遠のいのちである」と語っています。そして、この「いのち」を与えられた者には、ある特徴が現れます。それが 愛 — 兄弟愛です。

実際、ヨハネはこの「愛」があるかどうかを非常に厳しく扱っています。

ヨハネの手紙第一 4:7-8

7 愛する者たち。

私たちは互いに愛し合いましょう。

愛は神から出ているのです。

愛がある者はみな神から生まれ、神を知っています。

8 愛のない者は神を知りません。

神は愛だからです。

ここにはっきりと「愛がなければ、神を知りません」と書かれています。ここでの愛は兄弟愛をさしていると思います。

つまり、この互いに愛し合う兄弟愛がなければ、神を信じていると言っても偽りであり、信仰そのものが空っぽだ、とヨハネは語っています。

#### <4. 愛の結び帯>

「互いに愛し合いましょう」は、神様が私たちに与えられた新しい掟です。

先ほど、人の愛は「受容条件」を伴うと言いました。では、この掟の愛はどうでしょうか？

気が合う者同士なら愛し合いなさい、

話が合う者同士なら愛し合いなさい、

能力のある者同士なら愛し合いなさい、 そのように書いていませんですね。

この掟の愛も「受容条件」なしに受け入れる愛であると思いますね。

人は皆、欠けがあり、不完全であり、神様の義の前では罪あり、墮落した存在だと聖書は語っています。私たちもそれを認めます。しかし不思議なことに、「私は欠けがあります」と認めながらも、兄弟姉妹に対しては、厳しく評価してしまう癖があります。

互いに欠けがある人間ですから、人間関係においてもトラブルが起きる場合もあります。

また、トラブルが起きた時、たしかにどちらかが間違っている時もあるでしょう。けれど厄介なのは、「正しい側」にいると人でさえ、愛を欠いた方法で相手を正そうしてしまうことがあると思います。知識、経験、神学を武器のように使い、論理を積み上げ、自分が持つ優位性を用いて、相手を押しつぶすように「正しい方向」に動かそうとする傾向があります。

もしかすると、善意もあったのかもしれません。本当に神様のみこころの「互いに愛し合う」こと実践していたかと考えると どうもそうではなかった、と感じる時があります。

兄弟の間の人間関係において、私たちにはこのような弱さがあります。知らず知らずのうちに、また「自分が神になろうとする」思いが出てくることもあるでしょう。また、どれだけ気をつけていても、不満がでてしまう時もあります。

パウロは、兄弟の間にあるこのような弱さをどのように考えていたでしょうか。

#### コロサイ人への手紙 3:13-14

13「互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。

14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全です。」

この言葉から、パウロは、不満が生じる事実を前提にしているように見えます。「クリスチャンなら兄弟に不満があってはいけない」と伝えているのではなく、むしろ不満を抱いたとしても赦し合いなさいと勧めています。またそのすべての上に「愛を着けなさい」と伝えています。ある出来事があったあとには「愛をつけなさいですね。愛はすべてを完成に導く力なのです。

では、

この兄弟愛、「愛し合う」とは何か、どんな言葉で表現できるのか、ずっと悩んでいました。神様の恐るべき怒りも、限りない愛も理解できる。でも「互いに愛し合う」とは、どう言い換えられるのか。私がもんもんとしているのを見て、あるスタッフがこう言ってくれました。「互いに愛し合うって、互いを大切にすることじゃないかな？」確かに、その通りだ！と思いました。

主にあって、お互いを「大切な存在」として扱うこと。これこそ愛し合うことの実践の核心ではないでしょうか。忍耐できない姿があっても、イラッとする瞬間があっても、不満を抱いだいてしまう時がある。最後には愛を着けなさい。愛しなさい。大切にしなさい。パウロはそう言っているのだと思います。

よくよく考えてみると、私たちは皆誰かに忍耐されているし、愛されているし、大切にされている者なのだと気づくでしょう。

まず神様の無条件的な愛を頂いていますね。無条件的に大切にされています。それだけでなく、主にある多くの兄弟姉妹、信仰の仲間たちからも、同じように大切にされてきたと思います。

（時には相手をイライラさせるし、知らずうちに傷つけてしまうし、変わらない頑固さで困らせてしますが、不器用で色々な失敗をしてしまう時がありますが、）それでも主にある兄弟姉妹たちは忍耐してください、祈ってくださるし、気にかけてくださって、大切にしてくださっていますね。不思議で感謝なことですね。

神様からいただいた「いのち」は兄弟愛を生み出します。それは遠いところにあるものではなく、実際私たちの周りに起きていることでもあると思います、私は、私たちは沢山兄弟愛を受けていると思いますね。

### ヨハネの手紙 第一 4:11-12

11. 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです。

12. いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

神様が無条件の愛で私たちを愛してくださり、そして「いのち」を与えてくださいました。だからこそ、その恵みを見上げて感謝し、私たちももっと互いに愛し合う者でありたいのです。

もちろん、私たちには欠けもあり、不完全ですし、時にはゆがんだ姿をもっています。それでも、イエス・キリストからいただいた「いのち」を知り、それを土台として互いに愛し合うとき、神様の愛が私たちのうちに完成していきます。

兄弟姉妹を大切にすることでありたいです。

### ＜まとめ＞

私たちはもともと、神の怒りの下に置かれていた者たちでした。しかし神は私たちを深く愛し、御子キリストを与えてくださいました。神は愛です。キリストを受け入れ、私たちは「いのち」をいただきました。

この神の愛は、以前の私たちには想像すらできなかった「兄弟愛」を生み出します。かつては自分の基準に従つてしまふ人を愛せなかつた私たちが、いまや無条件の愛に触れられ、変えられていくのです。

アドベントを過ごす中で、キリストからいただいた「いのち」を思い起こしましょう。そのいのちが生み出す愛によって歩む者とであります。相手の状態や価値ではなく、神が与えた「いのち」を根拠に信仰の仲間を愛する、大切にするそのような歩みを歩みたいと願います。

お祈りいたします。